

短歌

おもかげを偲ぶ

宮崎 千 ズ

(会員・佐伯市中村北町)

自筆なる父の恩師の竹の絵の掛軸を見て心たか
ぶる

高齢の楠先生武を尊ぶ名は罷三郎と絵軸に印せ
り

高貴なる恩師の御心受けつぎて目立たず父はあ
と身まかりぬ



身まかりし恩師の羽織賜はりて涙を流せし父の頭ち来る

先生は一番弟子のわが父にみとられこの世を身まかりし
給ひし

その姿毅然と生きし先生も幼のわれらと親しみ遊びぬ

巾着より御錢おあしとり出せり先生は一合の酒ほほ笑みて待つ

一合の酒弟子の家に来てちびりちびりと身まかりし日ま
で

馬場の松に小さく消ゆる先生の姿見とどけ母に伝えし

わが家に御足運びし最終日師を背負う父の足は重かりき

父の師は格調高き御心を文武の中に教え給へり

剣の道突き打ち激しく鍛はれき父は師の心尊しと泣けり